

「こころと体の健康」講演会【後編】



今回の講演会は、「本音」の座談会。

会場の皆さんにも、医療人として「本音」をお話しようと決意。

気を悪くさせてしまう懸念もありましたが、後半は「六不治(ろくふち)」をお話させていただきました。

六不治

1. おごり高ぶり、謙虚に他人の意見を聞かない人
2. 財(お金)をケチって、身(健康)を軽んじる人
3. 衣食住に無頓着で、自制心がない人
4. 陰陽ともに病み、気が不安定な人
5. 身体が衰弱しきって、もはや漢方が飲めない人
6. 巫を信じて、医を信じない人

「六不治」とは、お釈迦様と同じ紀元前(およそ2500年前)に活躍した漢方の名医、扁鵲(へんじゃく)が唱えたものです。

「この6つを抱える人は、何をやっても治らない」ということです。

数々の奇病難病を治した扁鵲でさえも、「六不治の壁」を感じたようです。

昨今、患者の知る権利を勘違いしている「わがまま患者」が多いと聞きます。真面目で人が良過ぎるお医者さん、看護師さんほど体調を崩されています...

病院から「胃痛の原因はストレスからです」と診断されたことに納得いかない男性の相談を受けたことがあります。東洋医学の立場でも、かなりストレスがたまっていると感じたので、そうお伝えすると「もういい！他の薬局に行く！」と、怒って踵（きびす）を返されました。

その男性は、空手の有段者で「精神的ストレス」を認めることができなかったようです。男の、武道の、「プライド」が許さなかったのでしょうか……。

「ぜんぜん治らない！」「治してくれない！」と、病院や医者に不平不満を覚え次から次に医療機関を渡り歩くこと（いわゆるドクターショッピング）よりも全快治癒のためには

「あなた自身が、あなた自身を見つめ直すこと」

扁鵲は「六不治」を通じて、そう、現代人にも訴えかけているようです。

「六不治」冒頭の『おごり高ぶり、謙虚に他人の意見を聞かない人』。薬物依存者は決まってこう言うそうです。「私は薬物依存ではない！」と。「止めようと思えば、止められるんだ。俺は病気じゃない！」と。そうやってダルクへの入所を、最初は皆、頑なに拒むそうです。「俺は違う！私は違う！」と、自分の非を、病気であることを認めない。いや、認めることができないのも、きっと「病気」なのです。薬物依存が別名「否認の病」と呼ばれる所以です。

ダルクではミーティングの最初に全員で12か条を唱えています。その1番目「私たちはアディクションに対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた」。

「認める」ではなく、「認めた」(過去形)。まずは自分の問題点を「認めた」うえで、リハビリがスタートします。

太田東西が長崎ダルクを応援しているのは、彼らは「根っからの悪人ではない」と感じたからです。警察や刑務所のお世話になったことがあるとは思えないピュアなものを持っています。

彼らはただ「こころの寂しさ」を満たす方法を誤っただけです。

アットホームな長崎ダルクの皆さん



「宗教依存」

「ご祈願、お祓いだけで、様々な病気が治る！」

太田東西が健康を語る際、どうしても受け容れることができない考えです。

六不治の『巫を信じて、医を信じない人』。

霊能者、祈祷、占い、風水などに傾倒し過ぎて、医療を信じない人は治らないということなのです。

座談会の中で太田東西の体験談をお話しました。

うつ病と子宮筋腫で悩む女性のご相談を受けた7年前のこと。2週間分漢方をお送りしたところ、数日後に「新しい漢方を送ってください」と電話がありました。事情を聞けば、かかりつけ？の霊能者から「この漢方はあなたに合っていない。飲んではいけません！」と言われたようです。

これも当人の病気と割り切って、再度お送りしたところ、また数日後、「新しい漢方を送ってください」との電話…。漢方相談はこちらからお断りしました。それとも、太田東西もその霊能者を信じて、そのOKが出るまで、頑張るべきだったのか...？（苦笑）

薬物依存と同様、「宗教依存」も社会的事件を起こしています。

相手の「こころの弱さ」に付け込んで、教団教祖に依存させ、洗脳するというカルト（反社会的な宗教団体）は度々問題になっています。

この問題を僧侶である牛尾日秀さんにぶつけてみました。

牛尾さんは「仏教の開祖お釈迦様の教えから、現在の宗教界は大きく逸脱しています。葬式仏教、観光仏教が本来のお寺の役割ではありません。

お寺は『苦を緩和する場』であるべきものです」とおっしゃいました。

牛尾さんのご説法の中で、印象的な言葉があります。

「天命（神仏）に祈って、人事を尽くす」

一般には「人事を尽くして、天命を待つ」。

牛尾さんのそれは「祈りながら、努力をする」という生き方です。

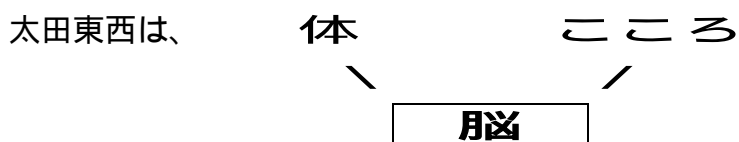
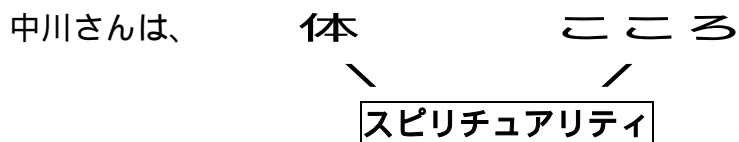
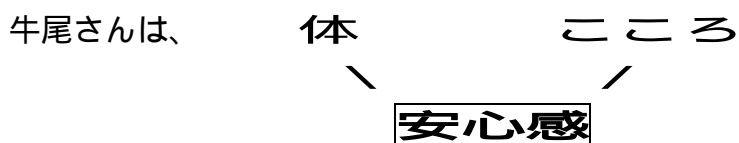
祈るということは「前向き」になること。プラス思考で、努力し続けていく人生。それを後押しする、依存から自立に導くことが本来の宗教、お寺の役目だと牛尾さんは語られました。

正法事門法華宗 妙法寺 牛尾日秀管長



「体とこころ」をつなぐもの

座談会のシメは、体とこころをつなぐキーワードを発表。



脳はCTやMRIで目に見える、実在するものですが、目に見えない「感情」を生み出しています。目に見える「体」、目に見えない「こころ」、両方を捉えていくことが健康には大切だと、お話いたしました。

さらに、「健康であるということ、健康に必要なものは？」という問いに

牛尾さんは、「苦を緩和する、場と人」が必要だとおっしゃいました。お寺は本来、生老病死の苦を緩和する「こころの病院」であると。

中川さんは、「自分の不健康な部分を受け容れること」だとおっしゃいました。自分の不健康さを認めることができる人は、健康な人だと。

太田東西は、「現状に感謝ができること」。

「感謝」という2文字をよ～く見ますと、「心」と「身」という字があります。生きているのが当たり前ではなく、「生かされている」という感謝の思いで生活している人に、健康で幸せな人が多いと実感しています。

終了後、楽屋で記念撮影。

合掌する4人の勇士からは、まぶしい「後光」が輝いていますでしょ？

太田東西薬局から

「太田東西寺」になる日も近いかな？（笑）

